

創立記念礼拝

宮城学院の土台

学院長 佐々木 哲夫

- ¹ 指揮者によって。伴奏付き。賛歌。歌。
- ² 神がわたしたちを憐れみ、祝福し
御顔の輝きを
わたしたちに向けてくださいますように
- ³ あなたの道をこの地が知り
御救いをすべての民が知るために。
- ⁴ 神よ、すべての民が
あなたに感謝をささげますように。
すべての民が、こぞって
あなたに感謝をささげますように。
- ⁵ 諸国の民が喜び祝い、喜び歌いますように
あなたがすべての民を公平に裁き
この地において諸国の民を導かれることを。
- ⁶ 神よ、すべての民が
あなたに感謝をささげますように。
すべての民が、こぞって
あなたに感謝をささげますように。
- ⁷ 大地は作物を実らせました。
神、わたしたちの神が
わたしたちを祝福してくださいますように。
- ⁸ 神がわたしたちを祝福してくださいますように。
地の果てに至るまで
すべてのものが神を畏れ敬いますように。
- 詩編 67 編 1-8 節

19 だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、**20** あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

マタイによる福音書 28章 19-20節

創立記念日は、宮城学院の誕生をお祝いする記念の日です。しばし日常から離れ、創立の原点に思いを馳せたいと思います。

北米合衆国ドイツ改革派教会は、三つの方策を掲げ、すなわち、教会建設による直接伝道、学校設立による教育、文書出版による啓発という三つの方策によって外国伝道を行うことを定め、南米、中国、東インド、日本などを伝道対象候補地に挙げました。日本での基督教禁令高札の撤廃(1873)や米国改革派宣教師バラの横浜での働き(日本基督教公会設立 1872)に鑑み、1876年の総会において日本を候補地に決定しました。1879年にグリングを最初の宣教師として東京に送り、伝道と『ハデルベルグ信仰問答』出版に着手し、2番目の宣教師として、1883年にモール夫妻を派遣しました。モールは2代目の宮城学院の校長となります。二人は、元大工町教会(1885)、番町教会(1885)を創設し、順調な働きをみせたのです。このころ、グリング夫人が女学校設立を要請し、1885年にホーイ、また、1886年にプールボーとオールトが横浜に着くなど、北米合衆国ドイツ改革派教会海外伝道局の活動が盛んな頃だったと考えます。

＊ ＊

ところで、プールボーとオールトとの送別礼拝が、1886年6月1日にペンシルバニア州ハリスバーグ市のセイラム・リフォームド教会で行われました。その時、136年前の送別礼拝に用いられた讃美歌と聖書箇所を本日の宮城学院の創立記念礼拝でも用いています。どのような気持ちでプールボーとオールトの二人はこの讃美歌と聖書の言葉を聞いたのかと思わされます。

挨拶の中でプールボーは「私は力足らず、弱いものですが、神がこの大事な任務をお与えになったと信じ、喜んで全力を尽くすなら、神は必ず必要なお力をお与えくださると思えました。日本の少女たち、夫人たちが助けを求めているのを知って、私たちアメリカの夫人たちは黙っておられるでしょうか」と決意を語り、オールトは、「イエスキリストの福音に耳を傾けようとしている興味あるしかも決して無学ではない人々の住んでいる国に出掛けよとしています。どうぞ私たちの働きのために祈ってください」と語っています。この二人に対し、海外伝道局のジョンストット総幹事は、日本でのキリスト教教育という重要な任務に就く二人に支援を惜しまない旨、激励の訓示をしております。

本日の聖書箇所は詩篇 67 篇の詩人は、自分たちを含めた全ての諸国の民が、神の救いを知り、感謝と喜びをもって恐れ敬うことを願っています。おそらく、二人の送別礼拝に集まっていた人々のスピリットを代弁する詩篇の言葉であったのでしょう。

ところで、米国オランダ改革派や米国ドイツ改革派のなどカルバンの流れにある神学では、特に、神の御前に生きることを徹底的に自覚する信仰と神の言葉である聖書の言葉を徹底的に重んずる信仰が強調されています。その信仰に忠実に、宣教師たちは、祈りつつ神と共にあゆみ、聖書の言葉を学ぶことを重要視したのです。プールボー一行は、7月2日に横浜から日本に上陸しました。その後、フェリス女学校を見学するも、ただちに、鉄道がまだ開通していなかったため海路によって、塩釜から利府を経由し、7月13日に仙台に着いております。目標に向かっての迅速な行動です。そして、直ちに、女学校の設立と女子教育に精力的に働き出したのです。最初に企画された学校名は、宮城英和女学校でした。設置目的は「基督教主義の道徳を基とし、最良の方法をもって高等普通の学課を女子に授け、善良有智の婦人を育成し、以って女子たるに愧ずるなからしめんとするにあり」とされています。具体的には、「清潔で身だしなみをよくし、慎み深い礼儀作法を守り、目上の者や教師に対し敬意をもって従い、清く正しい言葉を用い、友情を培い、神を敬うことによって、おのれの品性をたかめること。儉約を重んじ、学問に励む習慣を身につけなければならない」と記されました。

翌年1月付けのプールボーから改革派教会の女性会員にあてた手紙には、英語を一言も話せない16歳の首席の女子学生が3ヶ月後には英語の教科書の3ページ一言も全く間違わずに朗読したことが記されており、彼女が2週間前に押川牧師によって洗礼を受けたことも報告されています。日本の将来は彼女たちの人格にかかっているとプールボーは訴え、女学校にふさわしい校舎の与えられるよう支援を訴えたのであります。ちなみに、新校舎は1889年7月に献堂式を行なっています。宮城学院創立時の熱気が伝わってくる思いがいたします。

宮城学院の創立は、プールボーたちを土台にしているというのではなく、宣教師たちや彼らを支援してくれた米国ドイツ改革派教会の人々の信仰を土台として立て上げられたものといえます。送別礼拝で読まれた聖書の言葉「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」とのイエスキリストの言葉に忠実であろうと開国まもない日本に人生をかけてやってきた宣教師たちの活動と彼らを支えた米国ドイツ改革教

会の祈りと支援が土台なのです。今日の宮城学院もその土台にしっかりと根付いていることを認識したいと願います。

(2022年9月17日)